

「北斗七星」は「おおぐま座」の恒星の並びの一部です。明るい星で構成され、形もわかりやすいことに加え、日本ではほぼすべての地域で周極星に近い動きをするので、教科書でも扱われています。ポラリス（現在の北極星）を探す「ガイド星」の役割もしています。北斗七星は6個の2等星と1個の3等星で構成された、「斗＝柄杓（ひしゃく）」型の星の並びです。北斗七星を「柄の部分を上にして」見ると、上から4番目の星…つまり7つの恒星の真ん中の星だけが3等星です。

視力の良い人が北斗七星を見ると、上から2番目の星が2個に見える「二重星」とわかります。私の場合、普段かけている「遠近両用眼鏡」ではNGですが、天体観測専用の「度の強い眼鏡」をかけると2個に見えます。双眼鏡を使えば余裕です。2個の恒星のうち、明るいほうは2等星の「ミザール」、暗いほうが4等星の「アルコル」です。いずれも太陽系から80光年強の距離にあり、2つの恒星の実距離は約4光年離れていると考えられています。しかし、両者が重力を及ぼし合った「真の二重星」なのか、たまたま近くに見えるだけの「見かけの二重星」なのかは、まだはっきりしていないのだそうです。

2つの恒星の見かけの距離（離れ具合）は、わずか約12分（0.2度）しかありません。月の見かけの直径の半分以下です。裸眼では相当に視力が良い人でないと分離して見えないので、古来、視力検査に使われてきたそうです。しかし、現代の観測機器はこの2つの恒星を簡単に分離して撮影できます。動画の一番明るい星が「ミザール」、右上の少し暗い星が「アルコル」です。その間の左上に6等星か7等星の暗い星が1個写っていますが、これは星図に載っていない星で、恒星かどうか不明でした。

(2024年7月上旬／北軽井沢／東京から遠隔操作で観測)

